

〈社会科〉

社会的な思考力・判断力を育てる授業の工夫 — 対話型のペア学習、グループ学習を通して(第6学年) —

名護市立屋我地小学校教諭 宮 城 敬

I テーマ設定の理由

新しい小学校学習指導要領社会科の目標においても現行学習指導要領と同様に「民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」とある。「公民的資質の基礎を養う」とは、「社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断すること」としている。このことから社会科は、国際化や情報化が急激に進み、激しく変化する社会の状況の中で児童が生き抜くために必要な力を育てる教科であり、具体的には児童が「自ら問題を発見し、追究する力」を育てることが大切であると考え。

これまでの自分の実践をふり返ってみると、単元の学習内容を理解させることや調べ学習の技能を身に付けさせることを中心に行ってきた。また、思考力を高めようと児童の身近な資料教材を提示し情報を読み取らせて児童が考えを出し合う場を意識して設けることも心がけてきた。しかし、単元末に行うテストにおいて、暗記だけで対応できるような断片的な知識を問う問題に80%以上正答した児童は、全体の約62%であった。また、獲得した知識をもとに思考・判断を問う問題において80%以上正答した児童は、全体の約38%であった。その原因として考える場の設定と手法の工夫が不十分だったためだと考える。

そこで、本研究では、「憲法とわたしたちの暮らし」の単元において既習内容を押さえ、考える場の設定として問題解決的な学習において対話型の学習を取り入れることで社会的な思考力・判断力を育てる授業展開を考える。その手立てとしてペア学習やグループ学習、学級全体での学び合いの場を設定し、教師や共に学ぶ仲間と対話することで自分の考えを深めていく。単元の導入では、児童の関心を引きつける教材の提示の工夫により学習課題を設定させる。そして資料から必要な情報を読み取らせたり、教師や共に学ぶ仲間との対話を通して多様な見方や考え方に触れさせ、考えを再構築させたい。さらに、単元を通して、児童のものの見方や考え方の変容を見取れるワークシートの作成と活用を工夫していきたい。このように対話型のペア学習、グループ学習を通してより多様な見方・考え方に触れることで、社会的な思考力・判断力が育成されるだろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

「憲法とわたしたちの暮らし」の単元において、対話型のペア学習、グループ学習を取り入れた問題解決的な学習に取り組むことにより、より多様な見方・考え方ができ、社会的な思考力・判断力が育つであろう。

II 研究内容

1 社会的な思考力・判断力について

(1) 社会的な思考力・判断力とは

北俊夫(1995)は、思考力・判断力を「遭遇したさまざまな問題場面において、自分なりに解決する力」としている。つまり、社会的な思考力・判断力とは、児童が将来社会に出たときにひとりの人間として主体的、創造的に生きていくために必要とされる力である。

社会科における思考力・判断力とは、学習指導要領解説社会科編の中で、「社会的事象の意味について考え、判断する能力である」と定義されている。つまり、社会的事象を他と比較したり、因果関係を明らかにしたり、あるいは社会的事象と自分とのかかわりについて考えたり判断したりする能力である。社会的な思考力・判断力を育てるために各学年の目標は次のようになっている(表1)。

各学年において児童の発達を踏まえ、社会的事象から自らの問題を見いだし、その解決を通して社会的事象の持つ意味について考え、総合的に判断することができるようにするものである。つまり、自ら思考し主体的に判断して、問題解決したり創造したりする能力を身につけることができるようにすることをねらっている。

表1 社会的な思考力・判断力を育てるための各学年の目標

〔3・4学年〕	地域社会の社会的事象の特色を相互の関連などについて考える。
〔5学年〕	社会的事象の意味について考えるようにする。
〔6学年〕	社会的事象の意味をより広い視野から考えるようにする。

(2) 社会的な思考力・判断力を育成する意義

現行学習指導要領は、「生きる力」の育成を基本理念に掲げており、それを実現させるために「確かな学力」の育成のための取り組みの充実が必要だとしている。この「確かな学力」には、知識・技能、学ぶ意欲、自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等がある。児童は、将来の学習や生活の場において様々な課題や問題場面に出会い、それらを自分なりに解決しながら生きていかなければならないのである。変化の激しい現代社会においては、毎日が問題解決の連続になる。児童には、社会に対しての確かな見方・考え方が求められているのであり、社会的な思考力・判断力を育成する意義は、大きいと考える。

(3) 社会的な思考力・判断力の育成

社会科の学習において思考力・判断力を育てるためには、学習活動相互の関連を図ることが大切である。つまり、調べる、まとめる、考えるなどの学習活動を授業者だけでなく、児童自身が構成できるように、児童の問題意識を重視して授業づくりを進めなければならない。児童の問題意識を大切に、児童が自ら調べた事実やまとめたことから自分なりの見方や考え方を確立し、知識や技能を獲得できるようにするには、これまでの「調べてまとめる」あるいは、「調べて発表する」だけにとどまってしまうがちであった授業から、「調べたことから考える」「ともに学びあい互いの考えを深め合う」授業への転換を図ることが必要であると考ええる。

「考える力」を育てる授業を行うには、児童の既存の知識を揺さぶる発問の工夫が必要であり、学習活動のそれぞれの場面で児童が思考する発問を工夫する必要がある。

また、児童がじっくり考え合う活動を取り入れていく必要がある。児童がお互いに自分なりの考えを出し合うことは、自分では知らなかった事実や友だちの異なった考え方にふれる場となる。つまり、集団での学び合い・練り合いにより、より多様な見方や考え方ができるようになるのである。自分なりの考えや思いを表現し、話し、練り合う場を設定することが、思考力・判断力を高めていくことにつながっていくと考える。

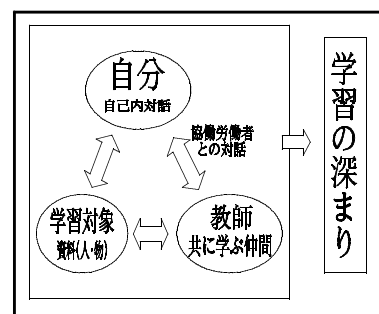
2 対話型のペア学習、グループ学習について

(1) 対話型の学習とは

対話によって自分の「問い」を追究し、対話によって、自分の「問い」をさらに深めていく。対話を通して他者と学び合い、考えを深め合っていく。この対話を授業の中に効果的に組み込んでいくのが対話型の学習である。

対話には、図1で表したように3つの対話がある。

まず、自分も教師や共に学ぶ仲間も学習対象への「問い」により、資料を活用して知識を得て、自分なりの考えを持つことから対話は始まる。



1つ目の対話は、教師や共に学ぶ仲間へ自分の考えを伝える時の対話である。自分の考えを伝えるためには、分かりやすく伝えるための思考が生まれてくるのである。

2つ目は、自分の考えを持ちながら相手の考えを聞く場合の対話である。ここで、相手の意見を批判的に受け止め、自分の考えと比較し、検討していく事でさらに思考が高まっていくのである。

3つ目は、知識がある程度蓄積されてくると自分自身の中にもう一人の自分と言うべきものが分化してきてかわされる対話である。つまり、自己内対話である。自己外対話でたくさんの知識を集め、その知識を基に自己内対話で新たな考えが生み出されていくのである。この3つの対話を通して学習を展開していけば、思考の深まりが期待され、児童の社会的な思考力・判断力は、育っていくと考える。

また、安野功（2005）は、対話型の社会科授業を行うことで、次の効果が期待できると述べている。

①子ども自らが対話する相手に問いかけていくことで「考える力・表現する力」が育成される。②友だちと考えるというプロセスを経て知識と知識を再構成し、納得した理解につながる。③考えることの深みや広がりを経験し、社会科を学ぶことの楽しさが味わえる。

(2) 対話型学習の工夫

① 学習形態の工夫

単元を通して多様な見方・考え方にふれるために対話型の学習を取り入れた学習形態を工夫していく必要がある。

考えを深め合うには、教師自身、学習者である児童自身が学習の流れ、対話の方法を理解することが

重要である。そこで、図2のような対話の流れで学習を展開する。まず、問題意識の共有化に効果的な一斉学習で学習課題の共有化を図り、ワークシートに書くことにより自分の考えを確立させる。考えをもとにペア学習、グループ学習において友だちの考えと比べたり、つなげたり、まとめたりの学び合いを行う。

この時、ワークシートに友だちと自分の考えとの違いをメモしながら対話を行うことで、お互いの考えを比較し、検討することができ、新たな自分の考えが生まれてくるのである。

その新たな考えをもとに他のグループや他の児童との全体での対話でさらに一人一人の考えを深めていく。

また、対話の方法を表2のように進めていけるように児童用の「対話の仕方」を作成し、それにより友だちとの考えを比べたり、つなげたりしながら新たな考えを構築させるようにしたい。

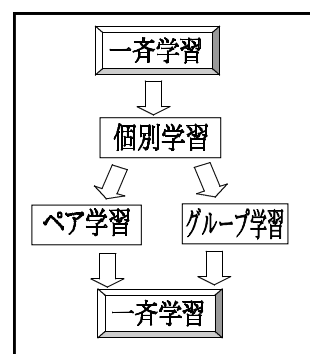


図2 対話学習の流れ

表2 対話の仕方

対話の目的	相手への伝え方	聴き取り方
話題の共有	◆これから伝えようとする話題(何についての話なのか)を伝え、相手の注意を惹きつける。	◆相手がどんな話題で話を進めようとしているのか、耳を傾ける。
対話的關係の成立	◆自分が言いたいこと(主張や結論)を簡潔に伝える。	◆相手に体を向けて話を聞く。
主張点や結論の明確化	◆自分が言いたいことを簡潔に伝える。	◆相手が言いたいことを聴き取る。
情報の共有化	◆主張や結論のおもとにある事実(根拠)を伝える。	◆主張や結論のおもとにある事実(根拠)を聞き分ける。
論理の明確化	◆相手の同意を求めたり質問を促したりする。	◆納得がいかない、腑に落ちないといった点が認められた場合、それを相手に伝え、質問する。
建設的批判と提案 ⇄		◆相手の意見を批判的に受け止め、不十分な点を相手に伝え提案する。
受容と吟味・熟考	◆相手の提案を素直に受け止め、吟味・熟考する。	

② 対話型の学習を行うための効果的なワークシート活用

ワークシートとは、授業内容にあわせた児童の手助けとなるプリントである。本研究では、社会的な思考力・判断力を育てるために次の4つの観点からワークシートを作成し、活用していきたい。

ア 自らの考えを深めるため

問題解決的な学習において、社会的事象に対してまず自分の考えを持つことが大切である。「書く」ことは、考えることであり、書くことにより自分の考えが明確になり、自信を持って自分の考えを練り合いのための意見として準備することができる。

イ 学び合いの手立てとして

ペア学習、グループ学習での学び合い・考え合う学習において、一方的に意見を言い合うだけでは、思考の高まりは、見られない。ワークシートを使うことで、友だちの意見を批判的に聞き、自分の考えとの違いに気づき、新たな考えを生み出すことができると考える。

ウ 自らの学びの評価のために

自己評価することにより、自分自身の思考の変容を確認できる。

エ 児童の一人一人の思考の変容や理解の深まりをとらえるため

(3) 対話型の問題解決的な学習とは

問題解決的な学習とは、学習者が直面する事象をとらえ、その問題の解決のための思考活動を行って究明・解決を図っていく過程で問題解決の諸能力を育成しようとする学習形態である。

子どもは、豊かな感性から作り出された学習問題を解決していくときに、「社会的事象を多面的にとらえて考える」「社会的事象と対話し、どうしたらよいのかを考える」「他の社会的事象と比較・関連づけをして考える」などの姿が期待できる。そうした学習場面を意図的に学習過程の中に組み入れることによって、「思考力・判断力」が育まれ、その力が、社会的価値の発見や問題解決の知恵を生み、今日の多様化した社会で「生きる力」につながっていく。

これまで述べた問題解決的な学習の流れの中で、学習者が互いに問題意識を共有化し自発的に問題を捉え、各自が自分の考えを作り上げ、それを持ち寄って、みんなでじっくり考え合う中で、自分らしく考え、新たな考えを生み出すことができるのである。この考え合う場や機会を重視していくのが、対話型の問題解決的な学習なのである。

(4) ペア学習、グループ学習

グループ学習は、指導のねらいを児童生徒の主体的、積極的な学習体験によって効率的、効果的に達成させるために集団をいくつかのグループに編成し指導する形態である。

一人でも社会的事象を多様な見方・考え方ができる。しかし、児童は、一面にこだわったり、行きとどまって、それ以上進めなくなったりすることが多い。そこで、ペア学習、グループ学習を取り入れることで、多様な意見の交換が行われ、行きづまりやこだわりから抜け出すことができる。みんなの「知識」と「知識」を比べたり、つなげたり、まとめたりすることにより自分とは違った友達の良さに触発され、自分の良さを発見することができるのである。対話によって自分の「問い」を追究し、対話によって、自分の「問い」をさらに深めていく。つまり対話を通して他者と学び合い、考えを深め合っていると考える。

(5) ペア・グループ編成

学び合いにより、より多様な見方や考え方ができるようにペア・グループ編成を教師が意図する集団関係を意図的に築き、図3のようにペア・グループ編成していく。一人から、ペアの学び合いの場合、このペアを基本に次の4人グループでの学び合いの場合へと移行していく。このペアもお互いにじっくり考える児童同士やお互いに意見を言い合える同士、誰かに引っ張ってもらおうと活動できる子は、リーダー的な子と組ませる。様々な関係の中、効果が発揮できるようなペア・グループ編成を工夫していく。

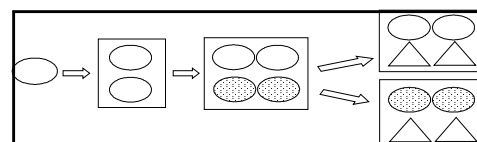


図3 ペア・グループ編成

(6) 評価について

社会的な思考力・判断力の評価については、学習過程における児童の思考の変化を見ることが大切である。本研究の評価は、国立教育研究所の評価基準に基づき児童の実態に合わせて作成した観点別評価を行う。評価方法は、ワークシートや行動観察、発言、児童の感想、単元テストから総合的に判断していく。

Ⅲ 指導の実際

1 単元名「憲法とわたしたちの暮らし」

2 単元目標

国の政治のよりどころである日本国憲法の精神を理解するとともに、社会を構成する一員として自覚を持つ。

3 評価基準

社会的な事象への 関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	観察・資料活用の 技能・表現	社会的な事象についての 知識・理解
①日本国憲法の根本の考え方や憲法と国民生活のつながりに関心を持ち、意欲的に調べようとする。 ②日本国憲法に基づくわが国の政治の働きについて関心を高める。	①日本国憲法が、我が国の民主政治や国民生活に果たす役割について問題意識をもち、学習の見通しを持って追究・解決する。 ②調べたことをもとに、現在の我が国の民主政治は日本国憲法の基本的な考え方に基づいていることを考え、適切に判断する。	①日本国憲法の基本的な考え方や国の政治、国民生活との関わりについて、国家の理想、天皇の地位、国民としての権利及び義務などを取り上げ、各種の具体的な資料を効果的に活用して具体的に調べる。 ②調べた過程や結果を目的に応じた方法で分かりやすく表現する。	①日本国憲法は、国家の理想、天皇の地位、国民としての権利及び義務など、国家や国民生活の基本を定めていることが分かる。

4 指導計画(全8時間)

段階	対話型学習	活動目標	時間	評価基準				評価の見とり
				関・意	思・判	技・表	知・理	
つかむ	情報 ↓ 個人 ⇄ 全体 ⇄ ペア ⇄ グループ	「憲法とわたしたちの暮らし」 ○政治と暮らしのかかわりについて考える。 ・1枚の写真から学習課題を立て調べる計画を立てる。	1	①	①			発言 ワークシート
		○日本国憲法と私たちの暮らしの関						発言

深める	情報 ↓ 個人 ↔ 全体 ↕ ↗ ↖ ペア ↔ グループ	係を調べる。憲法の三原則について調べる。 ○「基本的人権の尊重」について学習する。	2		①	①		ワークシート
		○「国民主権」について学習する。	3	①	①			発言・ワークシート
		○「平和主義」について学習する。	4		①		①	発言・ワークシート
		○国会・内閣・裁判所のそれぞれの役割について調べる。	5	②			①	発言・ワークシート
まとめる	個人 ↔ 全体 ↕ ↗ ↖ ペア ↔ グループ	○6年1組の憲法を作ろう。 ・学級の課題を出し合う。憲法の三原則のどれにあたるか考える。	6		②		①	発言・ワークシート
		・課題をもとに必要な憲法を話し合う。グループでお互いの意見を交換する。各グループの各項目ごとにランキングする。	7		②	②		発言・ワークシート
生かす	全体 ↖ ↗ 個人	○これまでの学習『憲法とわたしたちの暮らし』から自分たちができることについて自分の考えを出して話し合う。	8	②	②			発言・ワークシート

5 本時の学習（7／8）

(1) 本時の題材「憲法とわたしたちの暮らし」

(2) 本時のねらい

「日本国憲法」の基本的な考え方をもとに『6年1組の憲法』を作ることができる。

(3) 授業仮説

日本国憲法の基本的な考え方をもとにペア学習、グループ学習で学級憲法づくりを行うことにより、身のまわりの生活と日本国憲法の精神や三原則をむすびつけることができるであろう。

(4) 本時の展開

	学習活動	対話の流れ	教師の支援	評価
導入 5分	マッキーノ 1 前時までの学習を振り返る。 ・6年1組の課題と日本国憲法の三原則との関連 2 本時のめあてを確認する。 「6年1組の憲法」を作ろう	一斉学習 ↓	○前時にまとめたワークシートで確認させる。	
展開 35分	3 6年1組の課題から「6年1組」の憲法をつくらう。 (1)自分で作った憲法を短冊に書く。 (2)ペアでお互いに考えた憲法を発表し合う。 (3)グループでの話し合いを行い、課題をもとにどの憲法にするか決める。 4 各グループのランキング結果を発表する。 ○自分たちが考えた憲法は、日本国憲法のどの原則と関わりがあるのか考える。	個人 ↓ ペア ↓ グループ ↓ 一斉学習	○自分の考えを短冊に書くことで自分の考えを確認させる。 ○ペアでお互いの考え方を確認する中で、自分と違った考え方に気づかせる。 ○グループでのランキングには、正解はないことを伝える。 ○ランキングは、納得いくような理由をあげて説明できるようにさせる。	【思考・判断】 日本国憲法の基本的な考え方をもとに学級憲法を作ることができる。

まとめ	5 学習したことの感想を書く。		○自己評価をする。	
-----	-----------------	--	-----------	--

(5) 本時の評価規準

学習活動	評価規準	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	判断の状況		
				A	B	C
日本国憲法の基本的な考え方とわたしたちの身近な生活と結びつけることができる。	思考判断 ②	日本国憲法の基本的な考え方と結びつけた学級憲法を考える。	発言ワークシート	日本国憲法に込められた国民に対する思いを理解し、学級憲法を作ることができる。	日本国憲法の基本的な考え方をもとに自分たちの生活と結びつく学級憲法を作ることができる。	前時のワークシートから学級の課題と憲法の基本的な考え方の結びつきを確認させ、学級憲法を作らせる。
日本国憲法の基本的な考え方から作った学級の憲法を、発表することができる。	技能表現 ②	日本国憲法の基本的な考え方と結びつけた学級憲法を作り、ワークシートに表す。	ワークシート	自分たちの生活と結びつく学級憲法をつくり、表すことができる。	学級憲法を作り、ワークシートに表すことができる。	学級の課題と憲法の作り方の例文をしめし、学級憲法を作らせる。

6 仮説の検証

研究の仮説に基づく授業実践で、対話型のペア学習、グループ学習を行い、より多様な見方・考え方ができ、社会的な思考力・判断力が育ったかを授業前後の児童の実態アンケート、児童の活動やワークシートによって検証する。

(1) 対話型のペア学習、グループ学習の有効性

① 自分の考えと他者の考えとの比較検討

多様な見方・考え方をするには、自分の考えと他者の考えを比較することが大切である。「友だちの考えを聴いて、自分の考えと『同じこと』や『違うこと』を見つけることができますか」の問いに、事前アンケートによると約80%近くの児童がお互いの考えの違いに気づいている（図4）。しかし、「自分と友だちの考えが違うとき『なぜ』と考えますか」の問いに対しては、約80%近くの児童が「あまり考えない」「考えない」と回答している。事後アンケートでは、「なぜ」と考える児童が2倍以上になっている（図5）。これは、ペア学習やグループ学習で対話を行う際に自分の考えに「なぜそう思うのか」、友だちの考えに「なぜ、そう思ったのか」と考え方の違いに気づかなければ対話が成立しないからである。児童がペア学習、グループ学習により自分の考えと他者の考え方との比較を行った結果ではないかと考える。

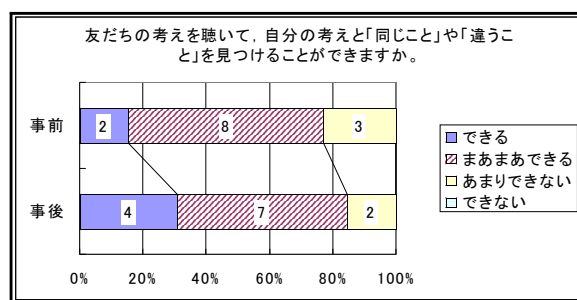


図4 他者の考えとの比較1

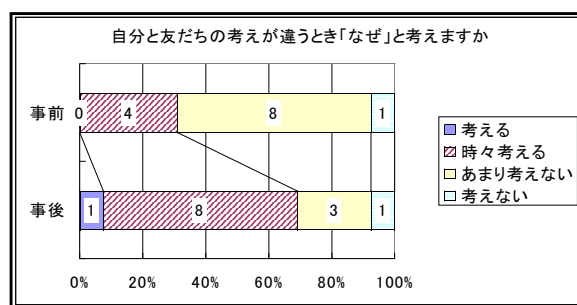


図5 他者の考えとの比較2

② 考えの再構築

検証授業では、日本国憲法の基本的な考え方とわたしたちの身近な生活を結びつけるために学級の課題から「6年1組の憲法」を作る学習を行った。

前時は、学級の課題を三原則と結びつけながら出し合う学習を行った。具体的には、一人一人が根拠を示しながら、3つの課題を発表し、グループでのランキングを行った。児童はこの学習過程において自分の考えと他者の考えを比較・検討して深めることができた。本時では、児童一人一人が「6年1組の憲法」の3つの約束を作った。2グループを例に取ってみると、4人とも前時の学習において自分で考えた課題に友だちの表現の良さを取り入れた憲法を作っていた。また、友だちの考えで良いと感じたものを取り入れ、自分なりにランキングを入れ替えたりしていた（図6）。

ペア学習やグループ学習の場で、自分の考えを根拠をもとに対話を行うことで、多様な見方・考え

方に触れることができ、思考力・判断力が高まったと考える。

A児 学級の課題

- 1 すぐ手を出さない
- 2 低学年が文句を言ったら言葉で教える。
- 3 あんまり用がないときは、人の手助けをする。

B児 自分の考えは、残している。

自分で考えた憲法

- 1 低学年にやさしくする
- 2 すぐ手を出さない。 B児の考えを参考に表現
- 3 言葉づかい

順位を入れ替えている。

1 言葉づかいを直す。
2 思いやりを持つ
3 人の話を聞く。 他のグループの発表をきいての表現

図6 ワークシート1

(2) 児童の多様な見方・考え方の変容について

① 自分の考えの変容

例えば「国民主権」についての学習では、「2006年に行われた沖縄県知事選挙において投票率64.54%は、高いか低いかに」について、ペアでの対話を行った。A児のワークシートを見ると、友だちの考えをメモするのではなく問いに対する自己内対話からでた疑問を友だちと対話する中で、自分たちなりの答えを導き出している（図7）。

また、日本国憲法の三原則と児童自身との関わりを結びつけにくい学習だったが、授業後の感想では、選挙権の大切さを理解した内容や政治には私たち国民が関わっていることが理解できた内容の感想があった。

2 2008年に行われた外国語通訳専攻では、投票率は、64.5パーセントでした。あなたは、この投票率は、高いと思いますか、低いと思いますか。

投票率は 高い (高い) 低い (低い)

自分の考え

「20才になるまでに3割の人は自分の考えを投票していないから」

社会事象への問いから見つけた自分の考え

ペア学習 友だちと話し合う。

(高橋) さんの考えについて

「20才になったこと、なるほどと思ったところ、自分と違ったところ」

選挙に対する意見が、改めて自分の考えに

友だちとの対話から自分の答えを導き出した

自己評価 ☒ 満足しよう
人 (満足できた) ☐ (まだない)

①新しく学習できました。 ☒
②友だちと考えることができました。 ☒
③材料と資料集などを扱うことができました。 ☒
④自分の学習方法を考えました。 ☒

対話を通して国民
主権を身近なものとして捉えた感想を書
いていく。

おは、20才をすぎた選挙に行かずにいます。
選挙の準備ができています。

図7 ワークシート2

② 社会的事象との関連性

「なぜ、クーラーのある学校とない学校があるのだろうか」の問いに対し、課題設定直後は、写真から見える情報だけからの回答でしかなかった。日本国憲法の3原則を理解する学習をペアやグループ、教師との対話を通して行った。その結果、単元終了後は、ある学校とない学校の環境を比べて「なぜ必要なのか」「どのような権利と関わっているのか」と根拠を述べながらながら表現できるようになった(図8)。記述内容から根拠を述べながらの表現のできない児童もあり、今後も根拠を示しながら表現する指導が必要である。

課題設定時	なぜ、クーラーがある学校とない学校があるのか	単元終了後
自分の考え	クーラがっている王立校は、この教員が、外風から入るから 根拠は、ない自分の考え	5. なぜ、クーラーがある学校とない学校があるのか？ ① クーラーがある学校とない学校があるのか？ クーラーがある学校とない学校があるのか？ クーラーがある学校とない学校があるのか？ クーラーがある学校とない学校があるのか？ 根拠を述べながら自分の考えをまとめている

図8 ワークシート3

③ 身近なくらしと結びつける

授業前は、ほとんど全員の児童が日本国憲法と自分たちのくらしの関わりについてについて「知らない」と回答していたが、最後の授業でのこれまでの学習を通して「自分たちにできることは何だろう」に対して100%の児童が日本国憲法を身近なものとして捉え、自分たちの生活に身近なものとして書くことができている。13名中6名は、日本国憲法と自分たちの関わりについて考え、今自分にできることを書くことができている。つまり、対話を取り入れたペア学習、グループ学習を行うことで、より多様な見方・考え方ができ、社会的な思考力・判断力が身に付いてきたことがわかる(図9)。

	A児	B児
児童の感想	私は、20歳から男女から、いろいろな投票できるようにしたい。成人の人がいることだから、お母さん参加のように思いました。	基本的な人権には、思いやり、返事があるということがあるから、人にやさしくし、あいさつで返事ができるようにしたいと思います。

図9 話し合う学習は好きですか

(3) ワークシートの利用について

これまでもグループ学習は、行ってきたが、事前アンケートで、「先生や友だちと話し合う学習は好きですか」という問いに対して、「どちらかという嫌い」「嫌い」という児童は、13名中8名いた。その理由として「何を話すか迷う」「学習について話し合うなんておもしろくない」などの意見があった。

そこで、話し合う学習内容や自分の考えを記録し、友だちの考えと比べさせるようにワークシートを工夫した。すると児童が安心してペア学習、グループ学習に取り組むことができ、より多様な見方・考

え方ができ学習に効果的だと考え、「つかむ」「深める」「まとめる」「生かす」段階において活用した。

ワークシートの活用後の児童の事後実態調査では、13名中11名の児童が肯定的な回答を得ており、事前アンケートでは否定的な意見だった児童も「友だちと話す楽しい意見も出るから」「意見を言い合うのが好き」など回答があり、話し合う活動においてワークシートの活用が有効だったことが分かる。このようにワークシートを使い、自分の考えを記録し、友だちの考えと比較しながら学習を進めることは、対話型のペア学習、グループ学習の活性化につなげることができたと考える（図10）。

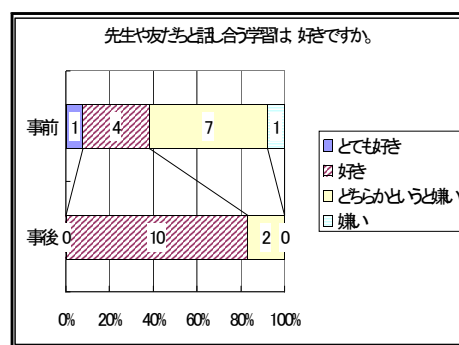


図10 話し合う学習について

また、ワークシートで学習過程の記録を教師が考察することで、児童の「思考・判断」の過程を把握することができ、評価に役立った。

(4) 単元テストに見る学習の定着状況

本研究は、児童の思考力・判断力の育成をねらいとしているが、思考力・判断力は、知識・理解がともなって育成されるものだと考える。単元の指導終了後に行った単元テストの結果では、知識・理解45点(50点満点)、思考・判断41点(50点満点)で、その合計の平均点が86点であった（表3）。

表3 観点別平均点

	知 理	思 判	総得点
9月までの平均	40	38	78
検証後の単元テスト	45	41	86

また、本校における学力向上対策推進計画では、目標の1つに「基礎的・基本的事項の8割以上を理解すること」という目標がある。

そこで、観点別の得点を100点満点に換算し、80点以上をとった児童の比率（通過率）は、次の通りであった。9月までの単元テストの平均と比較すると知識・理解が66%から77%、思考・判断は、38%から69%、総得点が54%から85%と9月までの平均の通過率を上回った（図11）。

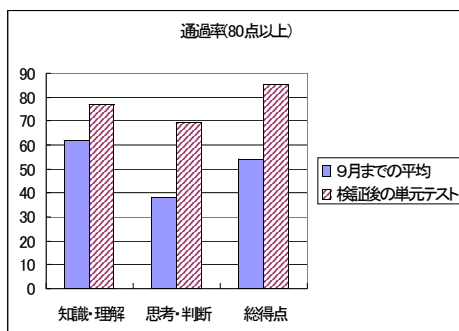


図11 通過率(80点以上)

このことから、対話型の学習で、知識をもとに対話を行うことで、より多様な見方や考え方ができ、思考力・判断力の育成だけでなく、学習内容の理解の深まりにもつながったのではないかと考える。

IV まとめと今後の課題

本研究は、対話型のペア学習、グループ学習を行うことで、より多様な見方・考え方ができ、社会的な思考力・判断力が育成されたと考え、授業を実践してきた。研究の成果と課題として次のことがあげられる。

1 成果

- 対話型のペア学習、グループ学習を繰り返し行うことで、自分と友だちの考えの良さや違いに気づき、自分の考えを再構築することができ、社会的な事象に対して自分なりの新たな考えを持つことができた。
- 単元を通して対話型の学習を行うことにより、児童が学習に主体的に取り組むようになり、資料活用に積極的に取り組む様子が見られ学習内容の理解が深まった。
- 対話型の学習を行うことで活動型の授業ができ、多様な見方や考え方に触れることで学習が深まり習得した知識が定着した。

2 課題

- ワークシートから知識やスキルの不足から学習の深まりの見られない児童がいた。対話を深めるために必要な知識の習得が必要である。
- 社会的な思考力・判断力育成のために、普段の授業の中でも対話型の学習は必要であり、自分の考えや思いを根拠を示しながら伝える表現力の育成をすべての教育活動の中で行う必要がある。

〈主な参考文献〉

- 安野功 2005 『社会科の授業が対話型になっていますか』 明治図書
 北俊夫 2004 『社会科の基礎・基本』 明治図書
 文部省 1994 『新しい学力観に立つ社会科の学習指導の創造』 東洋館出版社